堕ちていく白百合　Ⅳ後編

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19822206

R-18, エク霊, モ腐サイコ100, ♡喘ぎ, 二穴責め, 男性妊娠, オナホコキ, ふたなり

EntsCat様（user/11852202）とリレーエロ小説作りました！
やっほーい！！
ぜひ読んでいってくださいね！
エンツさんの所でもお読みいただけます！

そしてひよたまさん（user/39563383）からめっちゃ素敵なファンアートいただきましたぁぁ！（掲載許可済）
ありがとおおお！！

【堕ちていく白百合】とらのあなで通販中です！
文庫本/416P/R18
pixiv掲載本編＋溶けない愛蜜糖＋書下ろし３編収録
ご興味のある方は下記URLよりどうぞ！
https://ec.toranoana.jp/joshi_r/ec/item/040031175393

各種捏造設定含みます。
設定＞良家に嫁いだ元・霊とか相談所所長のあらたたさんが夫を突然死で亡くして未亡人に！
悲しみに暮れてたところに色々あったけどエクボに助けられてついに恋に堕ちて結婚した！
結婚したら若い二人には新婚旅行が待っている！行き先はまさかの…その行き先の決め方も…トンデモ展開すぎてあらたたは驚愕に倒れそうになっているが気にしない。
二人で楽しんでいたある夜、茂夫がやってきてとある奇跡の贈り物

をする。その贈り物とは…！

和装×生肌×仏壇×背徳感×大和撫子×兄嫁NTRの特盛大サービスのエロでございます。

登場人物
霊幻新隆＞良家の奥様。28歳。最愛の旦那を突然死で亡くし未亡人に。和装女装美人。良家の奥様らしく言葉遣いはお上品に。
九下部笑窪（エクボ）＞誠司の弟。35歳。道楽息子で兄と比較されて誠司に嫉妬している。霊幻を手籠にする係（えっ）
九下部誠司（モブキャラ）＞霊幻の最愛の旦那様。逝去済み。思い出程度に出てきます。

以下内容がふんだんに織り込まれておりますので、閲覧の際はご注意ください。
霊幻がめっちゃ奥様（だけども今回は師匠み強め）
霊幻が美人（美丈夫か）
霊幻が常に和装女装で浴衣も女物着てます（でも今回も男物も着てます）
♡喘ぎあります！
エクボが本家の次男坊で俺様だ！
エクボめっちゃ金持ち
男性体ふたなり表現あります（あそこが増えます）

上記ご参照の上、お読みくださりますと幸いです。

堕ちていく白百合　Ⅳ後編

※※※EntsCatパート※※※

「行きたい所、よ〜く狙えよ」
そう言うエクボを、新隆は睥睨する。
２人ともこれと言って行きたいところが無かったから、新婚旅行の行き先を、地図にダーツを投げるというとんでもない方法で決めることになったのだ。
エクボは行きたい所は学生時代に行き尽くした、と言うし、新隆は自分のお金じゃないので遠慮して何も言えなかったのだ。
「狙えも何も……」
新隆は誠司との時はつつましく『北海道か沖縄にしよう』と言ったら、『じゃあ両方行こう』と言われてチャーター機で日本を飛び回るというとんでもない贅沢をする羽目になったので、警戒しているのである。
（どうか安全で安価な所に当たりますように）
そう祈りながら新隆はダーツを投げたが、無情にもダーツはトスンとドバイに刺さった。
「ドバイ……！？」
「おー、ドバイか。悪くねぇな。俺が跡を継いだら海外には行きにくくなるし、丁度いい」
「ドバイって、ものすごくお金かかるんじゃ……！？」
ガタガタ震えながら新隆がエクボを見ると、エクボはふいと目を逸らす。
「まぁ……新婚旅行だしな……ちょっとかかるが、心配すんな」
いつもは『端金だ』としか言わないエクボが『ちょっとかかる』と言うのは、新隆の感覚だと『億近く行く』と言うことである。
「やっぱりもう一回投げなおし……！」
「だぁめだ。もう口がドバイなんだよ。予定調整付けて行くぞ」
口がドバイって何だよ、と新隆ははくはくと空を噛んでしまう。
結局エクボが行く気になったら、あれよあれよという間に準備は進

んで。
１１月吉日、２人は朝７時発の直行便でドバイに行くことになっていた。
新隆が朝食を食べながら、空港のＶＩＰラウンジでエクボと談笑していると、観光客の一団が近づいてきた。
「お、手続き終わったか」
エクボはその一団と知り合いのようなので新隆は内心首を傾げる。
（どこかで会ったような……）
「新隆、何度か会ったことあるだろ？九下部専属のシークレットサービス……護衛の連中だ。全員元自衛官や元ＳＡＴ（※警察の特殊部隊）出身の凄腕だ。安心していいぜ。
「よ、よろしくお願いします」
よく見ればゴツい男女３組である。萎縮しながら新隆が頭を下げると、にっと人懐こく隊長っぽい立ち位置の人が笑って手を振った。
「基本的にお二人のお邪魔はしないようにしますので、ご安心ください。なんか同じツアー選んだのかな、ぐらいのメンバーだと思っていてくれれば」
「は、はあ」
「わりぃな、やっぱ九下部の跡継ぎともなると、護衛無しに動くわけにはいかねぇんだよ」
「大丈夫、えと……」
「誠司の時にはそんなの居なかった、か？」
新隆が言いづらそうにしていることを先回りしてエクボが言ってくれる。
こくんと新隆は頷いた。
「恐らくお前には言ってなかっただけだ。いつでもＳＳがそばに居たはずだぜ」
「そっか。……そうだよな」
「俺はお前には隠さない」
じっとエクボの緑がかった黒い瞳が新隆を見据える。
「必要なことは見せる。……そろそろ時間か。行こうぜ」
エクボと新隆が動くと、６人の護衛も一緒に動く。
はた、と新隆は気が付いた。

（８人分のファーストクラス料金って、それだけで片道８００万ぐらいになるのでは──！？）
新隆は青くなる。お金持ちって怖い、と思った。
飛行機に搭乗すると、新隆とエクボはペアシートという名の個室に通される。
護衛達はそれを取り囲む席に座った。
「なあ、エクボ」
「んー？」
ウェルカムドリンクのシャンパンを飲んで、これまたウェルカムフードのナッツを食べながらエクボがのんびり返す。
「お前さ、誠司より先に俺の相談所に来てたよな？」
かちん、とエクボが固まった。
エクボにしては珍しく、恥ずかしそうに顔を赤らめている。
「……覚えてたのか」
「いや、というか思い出した。確か、２、３回来て、食事に誘われたような……」
「っだー！！忘れておけば良いことを！！」
「ということは、来てたんだな？」
チッ、と赤面したままエクボが舌打ちする。
「……お前と付き合うかも、ってことを本家の連中に言ったら大騒ぎになってな」
「まだデートにも行ってないのに！？」
「うるせえな、可能性だけでも大ごとなんだよ、九下部家では！
で、お前の内定を探偵使って終わらせるまでは、俺は近づいちゃいけないことになったんだよ。代わりに誠司兄貴がお前の人柄を探りに近づいたら、まさかの……ってのがことの顛末だ」
「あー……」
誠司は最初警戒心ＭＡＸで相談所に来ていたことを新隆は思い出す。何度も通ってもらう内にお互い気が合うな、と意気投合して、猛烈なアタックを受けて押しに弱い新隆はあっという間にほだされていったのだった。
誠司の印象が強すぎて忘れていたが、エクボも来ていたのがこれで確定した。

「ありがとな、疑問が解けてスッキリしたわ」
「おう。……先にお前を好きになったのは、俺だからな」
「エクボ……」
じっと２人は見つめ合う。
自然に目を閉じて、顔を近づけていった瞬間。
「九下部ご夫妻、ドリンクは如何ですか？お困りごとはございませんか？」
ドアをノックされてバッと身体を離した。
「あ、ああ大丈夫だ」
「手元のボタンでキャビン・アテンダントが参ります。いつでもご用命ください」
そう言って立ち去っていく足音に２人は胸を撫で下ろす。
「……昼メシまで時間があるな。俺様寝てるわ。何かあれば起こせよ。時差ボケ防止に寝てた方がいいから、できればお前も寝とけ」
そう言われたものの。
海外旅行が初めての新隆はソワソワして眠れない。
モニターにイヤホンを繋いで映画を楽しんだり、窓の外の景色を眺めたり、スマホで撮った写真を茂夫に送ったり、豪華な昼食に舌鼓をうったり、１２時間のフライト中、結局一睡もできなかったのであった。
「……ねむい……」
「だから言ったろ。現地時間２時だぞ？少し観光して……と思ってたが、こりゃダメだな。ホテルに行って少し寝ろ」
「ごめん……」
さりげなくＳＳの護衛に挟まれながら、エクボと新隆の２人が入国検査に向かおうとしたら、屈強な女性警官２人にやんわりと道を塞がれた。
「お待ちしておりました、九下部笑窪様、九下部新隆様」
流暢な日本語で言われて新隆はビクっと跳ねてエクボの袖を掴んでしまう。
ドバイの空港で、エクボはいつもの蓬色の羽織りに長着、黒いブーツ、新隆は裾に白百合の刺繍のある黒い長着に、鮮やかな紺色の羽織りに焦茶のブーツといういでたちだった。端的に言って、目立っ

ている。勝手に写真を撮られたのも一度や二度では無い。
悪目立ちし過ぎたのか、と新隆は不安になった。だから洋装で来ようと言ったのに、とエクボを恨みたくなる。
「あなた方は国賓です。ドバイで何かあられては困る。ここからは私たちドバイ警察のＳＰが護衛させていただきます」
違った。
「めんどくせぇな……」
エクボが頭を掻く。
「ご不便をおかけしますが、ご理解ください」
女性警官はにっこりと笑って、２人とその護衛をＶＩＰゲートに連れて行く。
入国手続きは一瞬で終わった。
「これから何処へ向かわれますか？」
空港から出ると、パトランプのついたフェラーリやランボルギーニ、ベンツが停まっている。ドバイの警察車両だ。
「ひょえええ……」
「お２人はこれからどちらへ？」
「ホテル、ブルジュ・アル・アラブだ」
ビビりっぱなしの新隆を置いて、エクボは平然と警官に答える。
「分かりました」
２人と護衛はそれぞれ警察車両に乗せられ、ドバイ１と言われる高級ホテルに連れて行かれた。
「ひょえええ……」
豪華さに新隆は目を白黒させている。
その間にエクボは英語で自分達と護衛のチェックインを済ませていた。
「新隆は疲れてる。部屋で休ませるから」
「分かりました。ＳＰが部屋の前で警護致しますので」
「……勝手にしろ」
エクボはムスッとしながらエレベーターに向かう。
エクボについて行きながら、すげぇ新婚旅行になっちまったな、と新隆は密やかに思った。
「ベッドでけぇー！」

何部屋もあるスイートルームの内装に目もくれず、眠い新隆は豪奢なベッドにダイブした。
靴を脱いでシーツの中に潜り込む。
「俺様は部屋の中やホテルをちょっと見てくるから、気にせず寝てろ。何かあったら部屋の外のＳＰか護衛に言え」
「んー……」
お言葉に甘えて、新隆は眠りに落ちた。

「新隆、新隆」
「ふがっ」
「そろそろ晩メシ行くぞ」
エクボに起こされて、新隆はホテルの１階に向かう。レストラン「アル・イワン」で、ＳＰに説明されながらアラビアンなビュッフェを楽しむ。
「お前、ホントに他人と仲良くなるの早いな？」
「そうか？」
２人は席について、エクボはワインを、新隆は炭酸水でディナーを楽しんだ。
部屋に戻って。
「俺、風呂入って寝るわ……」
「おー」
新隆はまだ眠気が抜けなかった。
着物を脱いで、バスルームに入って驚く。
「すごい……！」
既に湯の張られた大きな円形のバスタブには、赤い薔薇の花がびっしりと浮かんでいて、なんとも言えない薫香を醸し出していた。
「エクボ、エクボこれすご……！……えっ」
エクボを呼びに行こうとした新隆がバスルームのドアを開けると、裸のエクボがいて固まる。
両手にはローションボトル。
「……何考えてんだよ」
「見てわかんねぇか？」
顔を真っ赤にして新隆は顔を伏せる。

「……ばか……」
新隆はふいと後ろを向いてシャワーを浴び始めた。
その身体を、エクボの大きな手がまさぐる。
「ぶはっ！！何す……んっ……！」
抗議しようとした舌が絡め取られた。
「ん……ンぅ……ん、ん……」
シャワーの当たる壁に押し付けられながら、新隆は腕をエクボの首に回した。
粘膜を擦り合わせる感覚に酔いしれる。
「あ……っ」
糸を引きながら唇を離して、新隆が息を整えている間に、エクボはローションを手に出して、べたりと新隆に塗り付けていた。
「冷た……っ」
「あ、悪い。でもほら、乳首勃ってきた」
ぬりゅ、とローションで乳首を弄ばれて、ぁんっと新隆が甲高い声を上げた。
「ばかぁ……っ♡あっ、ああっ、やだぁ……っ♡」
ぬるぬる、くちゅくちゅとローションで身体中をまさぐられて、新隆は身をよじる。
「あ！」
性器をニュルリと握られてぎくんと新隆は背中を反らせた。
「ちょっ……刺激、強っ……あ！あぁんっ！！」
がくがくと新隆の足が震える。
「……ん？後ろ柔らけぇな」
アナルに手を伸ばされた新隆が、きゅ、と唇を噛む。
「……新婚旅行だし？……あるかな、と思って、風呂の前に……」
「最高かよ」
エクボは興奮した顔でアナル用ローションのボトルを手に取って出し、指であたためてから新隆の後ろにほぐしながら塗り込む。
「たまんねぇな……」
「あ、あ！」
くるりと後ろを向かされて壁に手をついた新隆の後ろに、ぬぐ、とエクボの性器が埋め込まれた。

「新隆……」
「ぁあ……っ♡はぁ、ん……っ♡」
ローションで乳首と性器をもてあそばれながら、ず、ずる、とエクボの性器を埋め込まれていく。
充足感にほうっと新隆は熱いため息をついた。
「イイ……っ♡コレ好きっ……♡」
「……めちゃくちゃにぶち犯されてぇか？」
耳まで真っ赤にして、新隆はこくんっと頷いた。
「あ♡あ♡あ♡えくぼ、ぇく、えくぼぉっ♡♡♡」
ごつごつと奥まで侵されて、新隆は甘い叫びを上げる。
「締めすぎだお前は……！」
エクボの額には余裕の無さに汗が浮かぶ。
「だってぇ♡きゅっとするとぉっ♡きもちいい……っ♡♡♡」
「スケベだなぁ、ええ？」
「ぁあ……っ♡」
ずるるると引き抜いて、ズパンと深く打ち込むと、ひくりと痙攣した新隆が掠れた声をもらした。
「も、ダメ……っ♡イク、イきます……っ♡♡♡」
「──っ！突然奥様らしく振舞ってみてんじゃねぇよ！！……燃えるじゃねぇかよ。いいぜ、イけ」
ズン、ズン、ズン、と早い律動に新隆はカリ、と壁を引っ掻く。
「ぁ……っ♡♡♡♡」
恍惚とした声を出しながら、びゅるると勢いよく新隆は精を壁にかけた。
「っく……！」
更に締まった内部に抗えず、エクボも新隆の中に出す。
「ぁ、あ……」
その感覚に、うっすらと新隆は身震いした。
「……湯船、入るか」
「……だな」
２人は後処理をし、大の男が余裕で入れる湯船に浸かる。
「すっ……げー、気持ちいい……」
新隆は花の浮かんだ風呂が初めてなので、バラを手に取ってうっと

りとしている。
「そいつは良かった……なあ、こっちに来いよ」
まだ淫靡な雰囲気は消えない。
新隆は一瞬躊躇ったが、風呂を泳いで反対側のエクボの腕の中に飛び込んだ。
さわ、とエクボの手が新隆の腰に触れる。
「ンッ……するのか？」
「ちょっとだけな……」
お互いの身体をまさぐりあって、２人の息が上がっていく。
「悪い、我慢できねぇ」
「あ」
背面座位の体勢で、ずぶぶとエクボの逸物がナカに入っていく。
「はぁっ、ぁん、すご……っ♡」
「新隆、俺の新隆……！！」
ばしゃばしゃと水面が荒れる。
「あっ♡なかにぃっ♡おゆが……っ♡」
体内を犯す水流に新隆は身震いする。
「ぜんりつせん、ごりゅごりゅしてる……っ♡」
新隆の伸ばした手が、ぐしゃ、と薔薇を握りつぶした。
「ぇくぼぉっ♡イ、イっ……〰〰〰〰っ♡♡♡♡」
きゅうう、とメスイキした新隆の足の指が丸まる。
「っは……♡」
まだ絶頂から降りて来れない新隆の中で、エクボもはぜた。
「は、っ……」
バスルームの中で２人の荒い息が反響する。
「エクボ」
目を閉じて、ん、と催促する新隆の唇に、エクボは深く口付けた。

※

次の日は朝食をホテルのルームサービスで取って、朝からブルジュ・ハリファの展望台に不本意ながら警察を連れて向かった。１５４階の『ザ・ラウンジ』に入る。

「すごい眺めだな！」
「ええ。ドバイで１番高いタワーですから。アラビア湾もあちらに見えます。ここからはドバイ・ファウンテンも綺麗に見えて……」
すっかり仲良くなったＳＰが新隆に説明してくれる。
少しずつエクボの機嫌が悪くなってきているのに、新隆は気付いていなかった。
景色を散々（新隆だけ）楽しんだ後、ラウンジについている昼食に２人で舌鼓をうつ。
午後からは、タワーの隣のドバイ・モールに向かった。

「ふあああ……！！」
その巨大さに新隆が声を上げる。
「さ、さっさと土産選ぶぞー」
慣れているエクボはスタスタとモールに入っていき、まずはチョコレート専門店に入る。
「何を買うんだ？」
「ラクダミルクのチョコだよ。ここの名物だ。俺は分家にも配るから、取り敢えず五百箱注文するが、新隆はどうする？」
思い出した。新隆は誠司も、とんでもない量のお土産を買っていた事を。
「えーっと……俺は１０個で充分かな」
「では発注しておきますね」
護衛の１人が店に残ってやり取りしてくれる。
エクボは次は雑貨屋に入った。
「ラクダ石鹸を五百十個頼む」
「ちょ、ちょっとエクボ、値切らないのか！？」
このマーケットでは値切りを楽しむ、とガイドブックには書いてあった。
だから新隆は値切りの現地語まで覚えてきたのだ。
「あ？いいんだよ、そういうのは護衛がやっといてくれるから」
新隆はこっそりむくれる。
「さて、土産はこんなもんか……適当に店を見て回るか」
「そうだな……おっ！」

雑貨屋の中に、ぬいぐるみコーナーがあった。
「これ、エクボに似てないか！？」
何処か目つきの悪い、ほっぺたが赤くなっている緑のラクダのぬいぐるみを手にとって新隆はニッと笑う。
「どこがだよ……」
「そっくりだ！よし、コレを買おう」
「へぇへ……」
財布を出そうとしたエクボが思いついて、同じ物をもう一つ手に取った。
「おふくろにも買ってやってくれ。お前からだって」
「？分かった」
新隆は楽しそうに値切り交渉を始めた。それを見てエクボが不機嫌になる。ショップ店員と仲良くなって、肩を組んで一緒に写真まで撮り始めたからだ。
「ほら、もう行くぞ！」
「えっまだ値切りの途中なのに」
「もうお前は値切んな！」
得意の話術を封じられて新隆も不機嫌になる。
（せっかくの新婚旅行なのに、楽しくない！）
その後もエクボが女性ものの民俗衣装を買ってる間も、新隆はむくれていた。

ローカル・ハウス・レストランでディナーを食べている間も、新隆はむくれていた。
「何怒ってんだよ」
「エクボこそ」
２人はラクダ肉のハンバーガーをナイフとフォークで食べながら、しばし睨み合う。
はぁ、と２人同時にため息を吐いて苦笑した。
「すまん。俺様ちょっと嫉妬した。お前が俺以外とばっかり話すから……」
「あ、それが原因か！俺はアレもダメこれもダメって自由を制限されてイライラしてた」

くす、とお互い笑い合う。
「もう少し俺様を構え」
「もう少し信用して任せて欲しい」
分かった、とお互いに言い合って。
その晩は疲れた２人は手を繋ぎながら、語り合いながら眠りについた。

次の日。相変わらず警官を連れながら、２人は巨大なプール施設、アクアベンチャーにいた。水族館の水槽の中を通るスライダーを楽しんだ後、名物の世界一高いウォータースライダーに２人して挑戦する。
「３、２、１、ゴー！」
足元のドアが開いて2人はほぼ垂直に落下していった。
「「うわあああああああああああ！！！！！！！！」」
２人の断末魔がドバイの青空に響く。
「はー、凄かったなー！！」
新隆の白いラッシュガードに、紅い乳首が濡れて透けてしまっている。
「……」
エクボは無言で自分の黒いラッシュガードを脱いで新隆に着せた。

併設の水族館も楽しんで。

２人はディナーも済ませて、ホテルに戻って来た。
「せっかくだしバルコニーでも少し休むか？」
炭酸水を手にエクボがそう提案した時。
ふわり、と天使のような白い影がバルコニーに舞い降りて。
「モブ！？」
慌ててバルコニーに駆け寄った新隆の肩を、エクボが抱きながら注意深くバルコニーへの扉を開けた。

ふ、と笑って影山茂夫は白百合の花を新隆に差し出して。

「おめでとう恵まれた方。幸せが師匠とともにあります」

そう言って、合ってるかな、と頬をかいた。
「どういう意味だ」
「僕たちからの師匠への結婚祝いです。師匠、今なら僕、師匠を子供を産める身体にできるんですけど、どうしますか？」
ぽかん、とエクボと新隆は茂夫を見る。
「律や芹沢さん、その他にも色々な人から力を分けて貰ってきました。……師匠、どうか幸せになってください」
つうっと新隆の目から涙が一筋流れる。
「俺はエクボの子供を産めるようになれるのか……？」
「ええ、そうです」
「おい危なくねえのか」
「安全性は問題ないはずです」
心配するエクボの手を、新隆はぎゅっと強く握る。
「エクボ、俺、エクボの赤ちゃん欲しい」
その切実な声にエクボは一瞬絶句し、そして強く、分かったと頷いた。
「ありがたく頂戴しよう。……やってくれ」
「準備はいいですか？師匠」
「ああ」
茂夫が新隆の下腹部に手を当てると、まばゆく発光する。
「ん、う……！！」
少しの鈍痛にうめく新隆の手をエクボが握る。
「頑張れ……！！」
「……終わりました。これで師匠は子供を産めます」
ふわ、と茂夫は宙に浮かぶ。
「ありがとな、モブ……！」
「いいえ、お幸せにー！！」
あっという間に茂夫は飛んで行って、見えなくなった。
なんとなく２人で目を合わすのが気恥ずかしい。
「じゃ、じゃあ……する？子作り」
新隆の言葉に一気に２人の顔が赤くなる。

「お、おう」
「身体がどうなったのか調べたいから、今日は風呂は１人で入っていいか？」
「お、おう、どうぞ」
ぼんやりとしていたが、エクボはハッとして新隆の着替えをすり替えておいた。今日は絶対にこれを着て欲しかったのだ、と。
はたして風呂から上がった新隆が見たのは。
ヴェール付きの、花嫁スタイルの可愛らしいベビードールだった。
「……エクボ？」
さっとエクボは目を逸らした。

※※※Ｋパート※※※

用意されたベビードールとエクボを交互に見て、じとりとした半目で顔を赤らめて溜息をつきながら、新隆は風呂での状況を思い返す。

心地の良い湯船の中でほっと一息つくのも束の間に、新隆はどきどきと心臓を高鳴らせる。さっき茂夫がホテルのバルコニーまでいきなり飛んできて、自分の身体に起こした奇跡を確認せずにはいられなかったからだ。
いやそれも大事だが、ドバイまで飛んできた茂夫に航空法だとか領空侵犯だとか色々ツッコミどころ満載だったが、気にし出したら超能力者の存在そのものがあれやこれやになるので、新隆はとりあえず自分の下半身に集中する事にする。

『これで師匠は子供を産めます』

「モブ、みんな・・・・・・」
相談所時代に関わってきた、純粋で悩み多き頼もしい仲間たちだった。そんな彼らからの奇跡の贈り物。
股間の辺りに目をやって手を伸ばすが、そこには普通にペニスがあ

るだけで、パッと見た感じは変化が無いように見えた。疑問に思って更に下に手を伸ばせば。
「あ」
いつもは平らな会陰の辺りが、今は十戒の海のように割れているのが指先の感触で分かった。その感触がまるでふっくらと潤う乙女の唇のように柔らかい肉感で、指で触れるのが憚られるほどだ。
試しに指をそのまま割れ目の中に進めてみる。だが滑りも何もなく、そこはきっちりと縛められており、それ以上入り込むのは痛みが発生すると予想されるほどに狭く、繊細だった。

風呂の中でこんなことがあったから、新隆は着替えながらも少し緊張している。

本当にエクボの入るのか？
俺出血多量で死なない？
世間の女性の皆皆様、尊敬します。

そんなことをつらつらと考えながら、手元の衣服に袖を通す。
これから、「オンナ」になるのだ。

ホテルのベッドは天蓋がついて、ビロードのカーテンで部屋の空間との仕切りが可能な作りとなっていた。今そのベッドは、新隆がいるバスルーム側からは見えないようにカーテンが閉じられている。

──エクボもきっと、楽しみにしている。

「エクボ」
「おう」
心なしか、エクボの声が上擦っているように聞こえて、つられて緊張してしまう。
「あの、入って、いいか」
「あ、あぁ、ドウゾ」
布一枚で隔てられた向こう側から聞こえる合図に、カーテンを手繰

る。重々しい衣擦れの音に、二人の視線が交差する。
「・・・・・・」
柔らかな純白レースの丈の長いベビードール。それはまるでウェディングドレスのような華やかさを表していた。ベビードールの奥にうっすらと見える脚元は、太腿までの丈のレースのガーターストッキングを履いている。頭には花嫁衣装の象徴であるヴェールが掛けられて、羞恥で伏目がちな新隆の表情を美しくカモフラージュしている。透けて見える新隆の白い柔肌がレースに彩られて、「処女」ながらも淫猥な雰囲気を醸し出して、思わず目のやり場に困ってしまうほどに美しい。
「そ、そんなに見んなよ・・・・・・これ、めちゃくちゃ恥ずかしい・・・・・・」
裾をぎゅ、と握って俯くその様子も儚くて、エクボは新隆の手を優しくとって、ベッドに組み敷いた。
「あっ」
とさりと寝かせられて、影を落とすエクボを不安げに見上げてしまう。だがエクボの表情は興奮しながらも優しく微笑み、慈愛に満ちていた。
「綺麗だ、俺の新隆」
「もうわざわざ俺のって言わなくたっていいんだぞ」
「・・・・・・そうだなぁ」
顔にかかるヴェールを、ゆっくりとめくる。うっすらと透けていた顔が顕になって、より一層その華やかさを見せつけてくるからたまらない。風呂上がりの火照った頬が桃色に上気して、唇が誘うように鮮やかに色づいていた。
「誓いの、キスを」
「じゃあ・・・・・・汝なんとやらはやんない？」
「もう分かりきってることだから今更いいだろ」
「情緒ねぇな」
「白無垢の下で式中ずっと派手におっ立ててた変態嫁には言われたくねぇなぁ」
「お前こそ・・・・・・んッ」
喋り出したら止まらないから、そんな新隆の口を言葉ごと呑み込ん

でしまうようにして、唇を奪った。舌がクチュクチュと絡み合って、名残がつっと糸を引く。新隆を黙らせるには、キスが一番効率が良いとエクボは最近学んだのだ。でもこれも、緊張の表れなのかもしれない。
うなじに口付けながら乳首をレースの上から引っ掻いてやると、ため息のような声が漏れて、耳を甘く侵してくる。ピンと立ち上がった乳頭がわかりやすく布を押し上げて、エクボの指にねだるように硬さを増していく。
「あ・・・・・・んっ、ふ」
「なぁ、子供ができたら、ここから乳が出るんだよな」
その言葉にカァッと新隆の顔が赤くなる。
「なっ、何言って、ひっ」
きゅっと摘まれて、指でぐりぐりと押しつぶされて、小さな悲鳴が上がった。
「俺様にも吸わせろよ」
「ばか、そんなの子供が優先に、ぁあっ」
レースを捲られて、乳首にかぶり付かれてチュウ、と吸われてしまい、性感帯としてすでに成長し切った乳首への刺激で胸が仰け反る。
「お前、子供に乳首吸われるたびにそんなにアへってたらどうしようもねぇな」
変態、とニヤリと笑うエクボに新隆はじとりと睨め付けた。
「こ、子供は、はぁ、っ・・・・・・お前みたいにやらしく、
あっ、吸わない、だろ、んっぅ」
「さぁな？案外テクニシャンかもしんねぇぜ」
「んんっ！あ、っ・・・・・・・や、ぁん」
「ほら、言えよ・・・・・・気持ちいいって」
「あ、っ・・・・・・ちく、び、きもち、いいっ・・・・・・♡」
白い胸に座する敏感な桃色の突起が、エクボの唾液で濡れて飴細工のようにつやつやと光る。それも愛おしくて、また口に含みつつ、もう片方の乳首も摘んで先を指の腹でいじめながら味わう。これから子作りをするというのに、すでにその乳首は甘く、見えない乳が流れ出ているように錯覚してしまう。

「やだ、っ・・・・・・そんなに、っコリコリしちゃ、ぁ♡・・・・・・い、ちゃう、ぅ・・・・・・」
「もうちょいな」
「はァ、ん・・・・・・ぁんん♡」
眉根を寄せて赤らめる顔が、白い頬によく似合う。震える薄い胸に腕で頭を抱きしめられて、その体温に満たされる思いだ。乳首を弄んでいた手を腹、腰、とじっくりと辿るように這わせて、脚の付け根から内股にかけてをするりと撫でる。いつも快楽に白い涙を垂らす陰茎は下着の布を押し上げてゆるく勃ち上がって、エクボの腹にすり、と自らを擦り付けてくるようだ。
「まぁたどエロいパンティ履いていらっしゃいますね」
「おっお前が用意したくせに！」
憤慨する新隆の履く下着は、ベビードールに合わせたような総レース作りの純白のパンティだった。腰回りを細いリボンで飾り立て、股の部分にはふんだんにフリルがあしらわれていてドレスのようだ。そんな豪奢なパンティの布でピン、と淫らにテントを張って、ひくりと次の刺激を待ち望んで震えている。布越しに先端を撫でれば、甘やかな嬌声が喉から飛び出す。
「んぁ♡」
「今日はすげえ甘く鳴くんだな」
耳を穿つ新隆の声が心地よい催淫の効果を発揮して、エクボの喉を生唾で濡らす。今日は殊更雌の匂いを感じてしまうが、それは致し方ないというもの。その要因は、布一枚を隔てて、もうすぐそこにある。
「下、脱がせていいか」
息を吹きかけながら問うと、それまで甘く鳴いていた新隆がひくりと震えて、腿に力が入るのがわかる。いくら隅々まで見知った仲といえど、その部分を晒すのには勇気がいる。知識で知ってはいても、自分から広げるのは訳が違った。
不安げにエクボを見下ろして、困ったように眉根を寄せる。
「気持ち悪いとか・・・・・・言わない？」
「え」
「ちんこ生えてんのに、まんこまでついちゃって・・・・・・子供

欲しいけど、でも」
「怖いか」
その恐怖は当たり前だとエクボは思う。それまで一般成人男性として生きてきたのに、女役として組み敷かれ、奇跡の贈り物とは言っても身体を書き換えられたようなものだ。茂夫から奇跡の力を受け取った時は幸せそうな顔をしていたものの、今はエクボの反応を目前にして、不安を顔いっぱいに貼り付けて見つめてくる。
そんな顔も惚れた弱みなのか可愛いと思えてしまい、エクボは新隆の雌の匂いで満たされる股間で嬉しい頭痛を抱えて頭を抑える。
恐怖に対し正直にこくんと小さく頷く花嫁に、エクボは手を伸ばして、身体を抱きしめてやる。
「大丈夫だ。俺様はお前の全てを愛してるからな」
「・・・・・・そっか。なら・・・・・・脱がせて」
エクボが腰骨にかかるパンティに指を掛けると、また腰が小さく震えるが、構わずゆっくりと下ろす。緩く主張する陰茎がふるりと晒されて、そこから会陰のあたりに目をやれば、見覚えのない割れ目が出現していた。先程からエクボを悩ませている芳香は、ここから漂ってくる。
「・・・・・・割れてんなぁ」
「う、ん」
気恥ずかしさで顔を逸らしながらも、見入るエクボの視線に必死に耐えるようにして震えながら、新隆が消え入りそうな声で呟く。
「じつは俺、ど、っ童貞、で」
「は？」
いきなりの告白でエクボが一瞬固まった。この反応に新隆がしどろもどろになって、赤面したまま緊張に顔を強張らせる。
「みたこと、なくて、ははは」
「見たことねぇって、まんこをか」
直球ストレートなエクボの言葉にぐっと息を詰まらせ、それでもこくりと頷く新隆に、エクボがふーん、と思案する。そしておもむろに何かをごそごそやると。

カシャリ。

聞き覚えのある機械音が聞こえて股座に目をやれば、エクボがニヤリと笑って手元のスマホの画面を見るように近づけてきた。
「えっなに」
恐る恐る覗き込めば、そこにはほんのりとくすんだ乳色の割れ目の奥に慎み深く口を閉じる、極桃色の粘膜の画像があった。
「これお前のまんこ。綺麗だなぁ」
「うっぎゃぁぁぁ！」
思わず脚を閉じようとしてエクボの顔面に膝蹴りを喰らわせてしまう。
「イッテェ！」
「ばかっ！はやく消せ！なんてもん撮って」
「ロックかけるぞ」
「いやぁぁぁ！」
ぎゃあぎゃあとせっかくのムードもぶち壊しな程に下世話な叫び声を上げる新隆に、エクボは笑ってスマホを放り投げた。とすん、と絨毯に落下した音がする。
「こら！精密機器をぶん投げるな！修理とか交換とか金が」
「はぁ？端金だろ。別にいい」
さらりとあしらってエクボが、また新隆に深く口付ける。せっかくの花嫁衣装である。それに撮影できた性器は惚れた欲目もあるのか、とても美しく見えたのだ。そうそう削除させられてはと逃げを打ったかたちだ。
口付けたままで隙あらば抗議しようとする舌を絡め取って、手元はストッキングを履いた太腿をじっとりと這う。内股にべたりとまとわりつくように掌が触れて這い回って、そのまま優しく割れ目の部分にそっと掌を押し当てる。掌に触れる肉がふくふくと柔らかく、そのまま力を加えたらすぐにでも壊れてしまいそうだ。
「ぁ、っ」
声にならない声が吐息と共に漏れ出る。自分でも初めてのそれに緊張と羞恥が最高潮に達して、頭がふらつきそうだった。
「エクボ」
「指入れるぞ」

「えっ！あ、まって、あ、あっ！」
ぐぶ、と節くれだった太い指が侵入してくるのを感じて、新隆が身体をびくりと硬直させて息を詰めた。エクボは指を挿入したその感触に思わず驚いた。その蜜壺は火傷しそうなほどに熱く熟れて、血流でふっくらと膨らんでとろとろと溶けて濡れていた。指が入り込んだことで割れ目が開き、微かだった雌のにおいがぶわりと濃くなって目眩がしそうだ。
「すっげぇ濡れてんなお前。エロいな」
「やだ、うそだ！さっき俺が触った時は痛くて、っあぁ♡」
「こんなに指入らなかったです、ってか」
入り口をぐるりと撫でるようにくすぐった後に、さらに指を増やして侵入していく。ぬぶうと難なく呑み込む大きな唇は、はしたなく涎を垂らして内股や脚の付け根をしとどに濡らしてぬるつく。吐き出す愛液でエクボの手が塗れて、サイドテーブルにある飾りランプにその手をかざすと、きらりときらめいて透明な雫をはたと落とした。この感触は病みつきになる。その纏わりつく愛液の匂いをスンと嗅いで、また手をゆっくりと沈めていく。
「ああ！・・・・・・な、んでぇ・・・・・・すご、なにこれ、ぇっ♡」
眉頭を寄せて目を硬く閉じて、熱っぽく息をつく新隆に目を奪われながらも手は止まらない。内壁を指でぐちゅぐちゅと撫でて弄び、掌を返して擦ると高い悲鳴が上がって新隆が仰け反った。脚が震えてエクボにしがみついて、イヤイヤと頭を振る。
「はぁ、あ・・・・・・えく♡だめ、それ・・・・・・おかしく、なるっ・・・・・・きも、ち、ぃ♡」
声に色が混じってきたことを耳で確認して、反応の強かったところを更にぐちぐちと弄ると、一際高い嬌声が上がって、身体が魚のように跳ねた。
「んっあぁああ♡」
叫びともつかない甘い声をはしたなく漏らして、びゅう、と精液が一筋吐き出された。散った白濁が腹や太腿に落ちて、たらりと線を描く。そしてエクボが手を挿し入れていた蜜壺は、絶頂と共に指でもわかるほどにきゅんきゅんとうねって最奥からこぽりとまた愛液

を溢れさせ、シーツに滴るほどに洪水になっていた。
新隆は息を切らして、下半身の違和感とこれまで感じたことの無い深い快感に頭が追いつかず、小刻みに震える肉体を制御出来ずに戸惑っている。思わず脚を閉じようとして腿を合わせるが、またエクボの手がぐちゅりと弄っておさまったはずの火種を再度激しく燃え上がらせようと煽ってくる。そんな手を新隆ががしと掴んで、潤んだ瞳で見つめる。
「エクボ、も、たぶん、いい、よ・・・・・・」
「でもお前こっち、処女だろ」
「なんか、じんじんする、から・・・・・・はや、く」
はぁはぁと息を吐きながらねだるように見つめられて、エクボの制御のタガが外れた。こんなに熱く誘う内部を早く味わいたいと欲望が先走る。
「挿れるぞ」
「ん、ッ」
先端をあてがうと、くちゅりと音がしてなんとも卑猥だ。触れただけでもその柔らかさに全てを持っていかれそうになって、エクボはたまらずそのまま押し入ってしまった。
「あ、ん、ッ！」
アナルとは異なる感触に新隆は戸惑ったが体内を巡る痺れは甘く、エクボの怒張を受け入れても痛みがない。なんとも言えない気持ちよさや満たされた気持ちで溢れて、新隆は思わず涙をこぼす。
「新隆？すまん、つい」
ぎょっとしたエクボが詫びると、涙で潤んだ瞳で新隆がふわりと笑う。
「入った、ね」
「処女卒業だな。痛みは？」
「ないよ。エクボの手マンが上手かったのかもな」
クスクスと泣き笑う新隆に愛しさを抑えきれず、思わず抱き寄せる。その手が温かく背中に触れる感触が心地よくて、幸福感で涙が止まらない。
動くぞ、と小さく耳元で囁かれて、その色香にぞくりと子宮が震える気がした。本当の意味で孕むのだと胎内が期待にまた濡れてぬる

つく感触さえしてしまう。
ぐちゅりと愛液の滑る音と共に内壁を擦る刺激が身体を穿つ。がっしりと硬度を持つペニスが甘い蜜を受けて何度も抽送を繰り返し、その度に覚えのある甘やかな刺激と未体験のじわりと差し迫るような痺れに、肉体の内側を掻き乱されるような感覚を覚えて背筋が震える。知らずエクボにしがみつく手に力がこもって、背中に爪を立てて何度もカリカリと引っ掻いていた。
新隆から与えられる痛みすらエクボにとっては甘い菓子のような快楽で、こんなに夢中になってもらえるほどに乱れる様は見ていて支配欲を存分に満たしてくれる。ふと思い立ち、エクボがぶにゅぶにゅとしたものを取り出して新隆に見せつけてきた。
「処女卒業記念だ。童貞も卒業しちまおうぜ」
そう言って目の前にかざすのは、透明シリコンのオナホールだった。何でそんなものを新婚旅行に持参しているのかなんて聞くのは野暮だろう。
あと、と付け足すようにグロテスクな真っピンクの極太バイブを取り出す。
「な、なにすんの」
怯える新隆の声にエクボはニヤリと笑い、両方を無遠慮にずぶりと新隆に装着させる。
「あぁああっ？！」
「童貞卒業と、二輪挿な」
「や、やだやめッぁあああ！♡」
拒否権などないとでも言うようにバイブのスイッチをオンにされ、柔らかなシリコンでペニスを犯される。エクボのペニスは新隆の雌に挿入されて、アナルのバイブの振動が肉壁を通じてじんわりと伝わってきて心地よく、抽送が癖になって止まらなくなっていく。
「新隆、スンゲェ気持ちいいぞこれ・・・・・・！」
そう言いながらもオナホールで扱く手は止まらずに新隆をガンガンと追い詰めていく。
「ぁんんっだめはげし、ぁああ♡ちんこ、だめ！や、イっちゃぁぁあ♡」
前立腺と蜜壺の奥とペニスの三点同時責めはこれまで感じたことの

ない強烈な快感を身体全体に巡らせて、新隆は快楽の波の受け流し方を完全に忘れて揺さぶられるままに喘ぎ、叫び散らす。
「も、や、イく♡イき、ますぅッ♡ぁっ、はぁ♡」
「奥様ぶってんじゃねぇよ！おら、イけ！」
「ああっ――♡」
脳を殴りつけられるような絶頂感に全身をびんと強張らせて一瞬息を詰め、ガクガクと痙攣する新隆。エクボが握り締めるオナホールの中には精液をたっぷりと吐き出して、白く内側が汚れてぬめる様が丸見えだ。その衝撃に歯を噛み締めて、顔は真っ赤に上気して切なげに歪む。
「ッ――！♡」
アナルでそれまでに感じていたメスイキと同等、もしかしたらそれ以上かもしれない深い絶頂を味わって強張る肉体に、エクボはガツガツとペニスを打ちつけて果てた。絶頂の瞬間にエクボから吐き出される精液を懸命に飲み込もうとビクビクうねる内部がペニスをさらに刺激して、もっと飲ませろと言いたげに伸縮を繰り返す。
「なんだこれ、すっげ気持ちいいな」
はっ、と息を吐いて黒い前髪をさらりとかき上げるエクボが、新隆にはとても色気溢れて見えて、絶頂の余韻で動けないのにときめいて蜜壺がびくりとまた伸縮をする。
「子作りって忘れちまいそうだぜ」
汗をかいて息を切らすエクボが、情欲に塗れた瞳を細くして嬉しそうに舌舐めずりをする。それはもう子作りと言えるような優しく甘いものではなく、完全に獣の淫行だ。
「っは、はぁッ♡や、も、あ」
強すぎた絶頂感で思考力を奪われて朦朧とする頭では、言葉を紡ぐことが出来ずに声しか出せない。だからまたエクボが抽送を開始しても拒否など出来ない。
「ああー♡んぁ♡ひ、あぁ！♡」
バイブの出力をさらに強くして、またペニスへの刺激をぢゅこぢゅこと繰り返す。とにかく気持ちよくて、蜜に塗れた性器が擦れ合うのが溶けるほどに頭を浮かせていく。
「えく、ぼぉ♡あかちゃん、できちゃうよ♡あぁ♡」

「作るんだよ！お前と！俺様の！子供だ！」
「あっ♡うれし♡できちゃう♡いっぱいだしてぇ！せいし♡だしてぇっ♡」
すでに一度射精されているのにそれでも足りないとのたまう新隆は、すでに立派な「オンナ」となっていて。
それに興奮するエクボは新隆から芳る雌の濃密な匂いに頭を支配されて「オトコ」になり。
「孕めよ・・・・・・！」
宣言と共に一際強く奥に穿てば、その猛攻に陥落して。
「あああぁあッ──！♡」
熱い吐息と悦びの涙を散らしながら、全身を淫らに震わせてまた絶頂し、一滴も漏らすまいとエクボの子種をゴクゴクと子宮が伸縮して飲み込んでいった。

幸せだ。

そんな言葉では言い表せないほどに大きな感情を抱えて、二度達してもまだ止まらない。
汗だくの二人が絡み合って、濃い時間をお互いに刻みつけていく。
言葉を交わすのも口惜しいほどに口付けを交わして、粘膜という粘膜を全てぐずぐずに犯しながら愛を深めていった。
「ぇく、ぁいしてる、っ♡」
もうこの言葉は褥の戯言などではないとわかるから、エクボの三白眼に思わず涙が滲む。
「愛してる、新隆」
そう言って、またどこからか取り出した指輪を新隆の左手薬指にそっと嵌めた。きらきらと煌めく宝石の眩い太めのリングは、新隆の細い指によく似合っていて、とても頼もしい守りにも見えた。
「こいつで、お前も子供も全部、守ってやるから。俺様の子を産んでくれ・・・・・・！」
「え、くぼ、うれし・・・・・・♡ッンううう♡」
喜びにまた涙を溢れさせて、口付けを交わして抱き合う。このまま溶けて混ざってしまえばいいのに、と思うほどにとろけて。

「あぁぁ・・・・・・・！♡」
「ッう」
ため息のような喘ぎ声と共にまた絶頂を迎えた二人は、肩で息をして抱き合いながら微笑んで、新隆の白い腹を優しく撫でるのだった。

※※※EntsCatパート※※※

新婚旅行から帰ってきて、１ヶ月が経った。
新隆はごくりと緊張に唾を飲み込んで、トイレで妊娠検査薬の封を開ける。

「……エクボー！エクボ、陽性が出た！！」

「何！？」
エクボは書類書き用の眼鏡を投げ捨てて、新隆に駆け寄る。
「でかした、やったな……！」
妊娠検査薬を覗き込んで、エクボは新隆を腹にさわらないように抱きしめる。
「何ですか、騒々しい」
騒ぎに義母と義父が顔を出す。
「親父、お袋、驚かないで聞いて欲しいんだが、俺と新隆の子が出来た」
「……は？」
どう言う事だと詰め寄る２人に、エクボはかいつまんで茂夫からの贈り物のことを話す。
「にわかには、信じがたいわ……！」
義母は額を押さえてよろける。義父がそれを支えた。
「信じられねぇなら、これから産婦人科に行くから、お袋もついてきて医者から話を聞きゃあいい。それなら信用できるだろう？」
え、ええ、と頷いた義母が慌てて支度に戻る。

「護衛を連れて行く。新隆、保険証持ったか？」
あっと言って新隆も支度に戻った。

※

「じゃあ、本当に新隆は妊娠してるんですね？」
「ええ、そうですよ」
もう何回目になるか分からない義母の質問に少々うんざりしながら医者が返す。
「珍しいですが、こういった身体を持つ方はこれまでにも例がないわけではないのです。妊娠可能な方はさらに珍しいですが……」
ぶわ、と義母の顔に喜びが広がって行く。
「新隆さん、でかしました……！！」
ひしと新隆の肩を掴む。
「これはまたとない僥倖ですよ……！これで九下部の家は安泰です！」
「あの……もうよろしいですかね？では予約を取っておきますので」
医者に診察室を追い出されても、義母の興奮は冷めやらない。
「護衛の車を増やしなさい。これからは新隆に何かあったら許しませんよ。比喩でなく首が飛ぶと思いなさい！」
義母が興奮して電話をかける。
「……喜んで貰えて良かった」
「当たり前だろ」
義母の様子に戸惑いながらも、新隆はエクボに笑いかける。

六ヶ月後、子供が娘だと分かったら義母は半狂乱になり、高価なベビー用の着物を買い漁りオモチャやグッズを揃えまくり、義父が流石に止めようとしたら実家の名前まで出されて脅してきたので、もはや好きにさせられていた。

それをエクボと新隆は、苦笑しながらも、幸せそうに見ていた。

※

数年後。

エクボは長男の新笑（しんえ）を抱いて、新隆と長女の笑隆子（えたかこ）と庭を散歩していた。
「とうさま、かあさま、池がきれい」
エクボによく似た凛々しい顔をした女の子は、義母が着せた値段を考えたくないワンピースを着て控えめに庭を楽しんでいる。
エクボの腕の中では、抱っこ紐に包まれた新隆似の男の子が、エクボと同じ色の瞳をきょろきょろとヤンチャそうに動かしていた。
「あれ？あの百合、枯れたと思ってたのに」
庭に咲く白百合に新隆が驚きの声を上げる。
「球根花にはたまにあるぜ。しばらく休眠してから、また咲くんだ」
エクボが目を細める。
「お前みたいだ」
新隆は思わず吹き出す。
「なんだよ」
「何でもない。あ、見ろよ。アイビーの蔦が白百合にちょっと絡んでる。白百合が俺なら、アイビーはエクボみたいだな」
次はエクボが吹き出した。
「なんだよ」
「お前、知ってて言ってるのか？アイビーの花言葉は、【永遠の愛】だぜ」
「えっ」
新隆が赤面する。
「それに、」

「【死んでも離さない】だ」

新隆の瞳が揺れる。思わずエクボの袖をキュッと掴んだ。
「離さないで」
「ああ。俺様は誠司とは違う。死んだくらいじゃお前を離してやらねぇよ。悪霊にでも何にでもなって、ずっとお前を縛ってやる」
微笑むエクボに、新隆の目から涙が一筋流れる。

「死んでも離さねぇ」

完